

ASIANALYSIS VII 報告

昨 2003 年 8 月 6 日から 9 日の間の開催が予定されていて、SARS のためにやむ無く延期された The Seventh Asian Conference on Analytical Sciences (ASIANALYSIS VII) が本年 7 月 27 日から 31 日まで、香港の香港浸會大学 (Hong Kong Baptist University, 以下 HKBU) で開催された。筆者は ASIANALYSIS VI の運営委員長であったところから、今回 International Advisory Committee (IAC) のメンバーの一人として参加した。以下はその内容の紹介である。

HKBU は北部の、香港中心部からも遠くない地下鉄の九龍塘駅の近くにある。日本からの参加者はキャンパス内にある呉多泰博士国際中心 (NTT International House) という施設を中心に、市内のホテルに分散・滞在した。

筆者は 26 日に日本を発ち、夕方到着した。26 日の天候はおおむね良好であったが、27 日夕方の welcome party 以後だんだん雲行きが怪しくなった。28 日の開会式の終わる頃には強い雨に見舞われ、開会式場からの移動に影響があり、皆がそろってとるよう配慮された昼食が遅れるということもあった。

スケジュールは 28 日から 30 日までの 3 日間は研究発表、31 日がエキスカージョンにあてられた。

第 1 日目の 28 日には 9 時過ぎから開会式が行われた。最初に HKBU 学長である呉清輝 (C. F. Ng) 名誉実行委員長による開会の挨拶があり、引き続き HKBU の科学部長である Wong 教授による歓迎の挨拶があった。

続いて Wong 教授の司会で最初の plenary lecture が Iowa State Univ. の Daniel Armstrong 教授により “High Efficiency Microbial Analysis, Viability Determination and Antibiotic Screening: The Marriage of separation Science and Microbiology” と題して開始された。午前中にはさらに、Washington



<http://www.hkbu.edu.hk/~asiana17/> から転載

呉名誉委員長開会の辞

Univ. の Michael Gross 教授による “Can Proteomics and Mass Spectrometry Identify the Antigenic Peptide that Causes Diabetes and Determine Protein/ Ligand Affinities?”, 及び大阪大学柳田敏雄教授による “Single Molecule Nano – Bioscience” の 3 件の plenary lecture が行われた。もう 1 件の plenary lecture は、29 日の午後一番に Iowa State Univ. の E. S. Yeung 教授により “High-Speed High-Throughput Screening of Biomolecules” と題して行われた。

今回の会議には 30 以上国からの参加申し込みがあり、事前登録者数は 440 名であった。このうち、10 名以上の事前登録をした主な国・地域は中国本土 168、地元香港 153、日本 71、韓国 60、台湾 29、タイ 20、シンガポール 10 名であった。



国際会議場前に集まった参加者たち



講演風景



Cham ('04), Kim ('07) 主催国代表両教授

バンケットにて



ポスター会場風景

研究発表の件数は、前回が ICAS2001 と同時開催と言うことで比較しにくいですが、IAC の会議（初日）に配布された集計によれば、招待講演を含む口頭講演 212 件、ポスター講演 286 件が申し込まれたとのことであった。

講演会場は 6 会場で、1) Analytical Atomic and Molecular Spectroscopy, 2) Bioanalytical Chemistry, 3) Electroanalysis and Electrochemical Techniques, 4) Elemental and Molecular Mass Spectrometry, 5) Flow Analysis and Separation Science, 6) Chemical Education/Low-Cost Instrumentation という区分けで講演が行われた。6) にはマイクロスケール分析法が多く扱われるとともに、教育法も議論されていた。他に、前回に引き続き、Chemical Analysis of Herbal Medicines と題する mini-symposium が開かれた。mini-symposium には、Environmental and Field Analysis および Ultra-sensitive and Ultra-small Volume Analysis の二つも加えられ、一般講演とは別ではあるが、同時進行の形で進められた。講演はほとんど液晶プロジェクターを使って行われており、前回よりも活発な質疑応答が行われていたように見受けられた。

ポスター発表は、講演の 1) から 5) 及び Chemical Analysis of Herbal Medicines に関するものについて、初日の午後と 2 日目の午前と午後に分けて行われた。場所がわかりにくく、外気に解放された場所で、蒸し暑く、見に来る人も少なく、がっかりした発表者も多かったのではないかとと思われる。発表取りやめの件数も少なからず見受けられたが、各国の事情を反映した発表も見られ、もう少し展示場所が分かりやすく、しかも

ボードの配置、照明等が工夫されていれば、もっと多くの議論、情報交換が行えたのではないかと惜しまれる。なお、ポスター発表者の意気込みを誘うためにポスター賞を設け、表彰が行われた。あらかじめ参加者にノミネートさせて、30 日の午前に審査のためのポスター発表を改めて行った。5 人の審査員による審査の結果に基づき、当日午後 2 時から表彰式を行い、Anal. Sci から賞を受けた 2 人を含む 7 人にポスター賞が授与された。

なお、前回の例にならい、今回も若手をプロモートするため、各国の 50 名近くの若手参加者に援助を行ったとのことである。

研究発表の最終日 30 日夕刻から、海岸までバスで行き、目の前の Jumbo Floating Restaurant というところへ船でわたり、バンケットが催された。実行委員長の Wing-Hong Chan 教授の挨拶の後、獅子(?)に Chan 教授と韓国の Hasuch Kim 教授が朱を入れた後、日本の獅子舞に似た余興が披露された。その後盛大な宴会が始まり、乾杯で成功を祝い、記念撮影、名刺交換がそここでなされた。終了後、元気者は 2 次会へと盛り上がったようである。

31 日は快晴、バス 2 台に分乗し、Ocean Park と Victoria Peak へのエキスカッションが催された。気温の上昇とともに息苦しいような湿度と、人の多さに気押されながらの Ocean Park 観覧を 5 時まで行った。その後、葛籐折れの続く道を Peak へと向かい、夕方の美しい Victoria Bay 方向の眺めを満喫して帰途についた。

次回以降の予定は初日に IAC メンバーにより話し合われた。前回も今回も、本来は韓国が開催予定国であったが、諸般の事情により他に譲ったことから、この経緯を考慮し、韓国が最優先と決められた。また SARS で延期されたが、各種国際会議の開催事情を考慮し、次回以降、奇数年開催に戻すことが決められた。そこで韓国では、2007 年に開催とすることとした。ただし 3 年後となるため、来年 2005 年の開催が可能ならこれも可とし、熱心に開催を希望する武漢(中国)を第一候補、台湾を第二候補とすることにした。その後、武漢は 2009 年に回ることとなり、現在台湾の回答待ちの状況である。

なお、IAC メンバーにも国の偏りがあり、これは出席者の偏りを反映しているところから、今後インドネシア、インド、バングラデシュ、イラン、フィリピン等々の国からの参加を促そうということになった。

(2004 年 8 月 9 日記す)

〔東京都立大学名誉教授 保母敏行〕